

< 小学校音楽部会 >

I 研究主題

「一人一人の児童の音楽活動を豊かにする指導と評価」

II 研究の概要

本研究では、昨年度の音楽活動の基礎的・基本的な能力を培うための指導と評価の一体化、及び個に応じた指導の在り方についての研究を踏まえ、一人一人を生かしながら、主体的で創造的な学習活動が展開されるための指導と評価について、実践を通してより明確にすることとした。

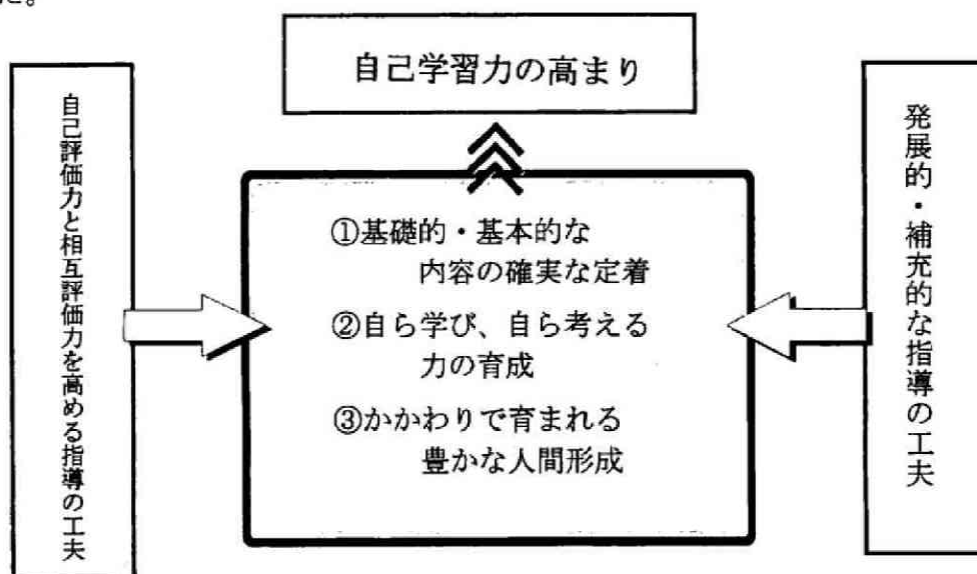
そこで、研究主題を「一人一人の児童の音楽活動を豊かにする指導と評価」とし、“自己評価力・相互評価力を高めるための指導の工夫”“発展的な指導や補充的な指導の工夫”に視点を置いて、研究開発を行った。

III 研究の内容

1 研究主題について

児童が主体的・創造的に音楽活動をするためには、教師は、児童一人一人が学習のめあてをもち、自分の方法で活動し、自己を振り返るといった“自己学習力”を高める指導をしていくことが大切であると考えた。

そのために、①学習指導要領に示された基礎的・基本的な内容の確実な定着②自ら学び、自ら考える力の育成③かかわりで育まれる豊かな人間形成、を重視した授業を自己評価力・相互評価力を高める指導の工夫と、発展的な指導や補充的な指導の工夫に視点を置いて研究開発し、検証を重ねた。



2 研究の視点

一人一人の児童が主体的・創造的に音楽活動を楽しみながら、情意面と能力面をバランスよく高めていくためには、学習集団の中における一人一人の児童の自己学習力を高めながら、個に応じた指導と評価をしていくことが大切である。それは、学校の音楽の授業において、児童

が音楽を合わせたり聴き合ったりしながらかかわり合い、お互いのよさに気づき、認め合うことを通して一人一人が生かされ、成就感や感動を共有し、音楽的に高まっていくことが大切であると考えたからである。この考えに立ち、研究の内容を次の二つの視点で焦点化し、授業を通して検証することとした。

(1) 自己評価力・相互評価力を高める指導の工夫

学習集団の中で児童が互いにかかわり合いながら主体的・創造的に学習を展開し、最終的に自己の学習を価値付け、個の学びを確立していくために、本研究では、児童の自己評価力・相互評価力を、育てたい資質・能力としてとらえた。

①児童による評価を整理・修正し価値付け、次の指導へ生かす。

児童一人一人が、学習のめあてをもち、自分の方法で主体的に活動し、自己を振り返ることにより“自己学習力”を高めながら、音楽の質的高まりへと学習を展開していくことができると考えた。

また相互評価の場面において、児童が、かかわり合いや認め合いを通して、自他のよさに気づきながら創造的に学習を展開し、情意面と能力面とがバランスよく音楽的に高まっていくであろうということにも着目・重視し、児童の自己評価、相互評価を整理・修正し、価値付け、次時の指導へ生かす。

②多様な評価資料をもとに総括的に評価し、児童に示す。

自己評価、相互評価を生かした多様な評価資料を、児童へ示し、児童自身が次へのめあてをもてるようにする。

(2) 発展的な指導や補充的な指導の工夫

①教材の選択

どの児童も質的に高められる教材を選択していく。

②児童が相互に高め合える場の設定

主旋律がなかなか演奏できず、補充的な指導を必要としている児童も、また、主旋律だけでなく副次的な旋律も演奏するというように、発展的に学習を広げていくことができる児童も、互いに合わせることによって一つの音楽を共有し、互いに教え合い、補い合いながら一つの音楽をつくっていくことができる。このように、音楽科では教科の特性から、学習集団の中で、どの学習状況の児童も、自分の学習状況に応じて別々の課題に取り組むだけではなく、お互いの演奏を合わせたり、聴き合ったり、工夫し合ったり、補い合ったりしながら基礎的・基本的能力を身に付け、みんなで一つの音楽をつくり、高まっていくことを大切にしたいと考えた。すなわち、個の学習が学習集団の中で価値付けされ、豊かに関連し合いながら、学習が質的に高まっていくような教材の工夫や、学習活動の指導の工夫が大切であり、指導の手立てを意図的に指導計画に組み込む。

③評価の工夫

児童の学習状況を正確な記録と豊富な情報により適切にとらえ、児童の気持ちや願いに寄り添った指導ができるよう、授業の改善に生かしていく。

IV 指導事例

1 「自己評価力・相互評価力を高めるための工夫」の実践例

(1) 題材名 音の重なりを感じて (第5学年)

(2) 研究主題との関連

生涯にわたって音楽に親しむ態度や音楽とかかわる意欲を育てるためには、自己学習力を育てることが大切である。本題材は、友達とかかわり合いの中で、音の重なりを感じ取りながら、自分の表現を工夫すること、また、児童の学習状況を把握し、個に応じた指導や評価の場面を計画的に行うこと、また、児童自らの気づきを大切に、より高い音楽的価値を求められるようになることを重視した。

(3) 題材の目標 旋律と和音がつくる音の響きを感じ取って、表現を工夫する。

(4) 題材の評価規準

	㉒ 音楽への関心・意欲・態度	㉑ 音楽的な感受や表現の工夫	㉓ 表現の技能	㉔ 鑑賞の能力
題材の評価規準	音の重なりに関心を持ち、進んで表現を工夫しようとしている。	音の重なりを感じ取り、表現の仕方を工夫している。	低音や和音の働きを感じ取り、音量や強弱、速度などをバランスよく演奏している。	演奏の工夫点や音の響き合いのよさを感じ取って聴いている。
学習活動に即した具体的な評価規準	①音の重なりや響きに興味を持ち、進んで表現しようとしている。 ②友達と協力し進んで音楽活動に取り組もうとしている。	①曲の特徴にふさわしい表現を工夫している。 ②よりよい表現にするため楽器の音量や音の出し方を工夫している。	①リズム、旋律、強弱、速度などの要素を感じ取って演奏している。 ②旋律の流れに合う和音の響きをつくって演奏している。	友達の演奏を聴いて、よさやすばらしさに反応し、演奏の工夫や美しさを感じ取って聴いている。

(5) 題材の指導・評価計画

時	○学習内容 ・学習活動	「自己評価力・相互評価力を高めるための工夫」 〈研究の実際〉の実践例
第1次 主旋律と和音の響き合いを感じ取る。(2時間)		
1	○「こきょうの人々」を知り、曲想をつかむ。 ・歌詞唱をする。 ・旋律を演奏する。 ・主旋律と低音を合わせて演奏する。	※児童による自己評価などを基に、次時の児童への手立てを考える。 (例) 児童 児童Aの自己評価 音の重なりの意味がわからない 教師 音の重なりが感じられるようにペア学習を入れる。 ㉒㉑㉓
2	○和音の響きを感じ取る。 ・ハ長調の和音について知	※ペア学習で探した和音が本当に合っているか、他のペアと聴き合うことで確かめ合う。(相互評価) ㉑㉒

り、その働みに気付く。
・旋律に合う和音を探して演奏する。



あれっ、DさんとEさんの和音が違ってるよ。

じゃあ、もう一回やってみよう。
どっちの和音があってるのかな。

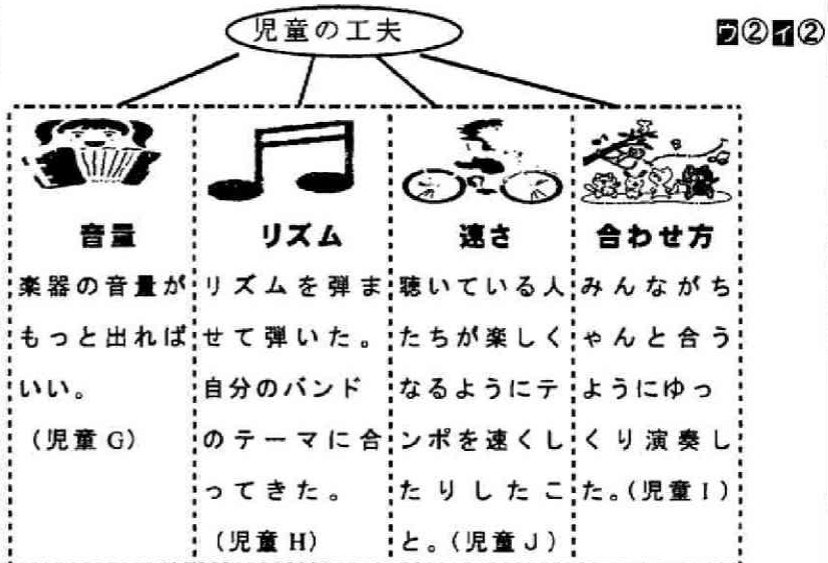
相互評価（児童のつぶやき・気付き）から教師の指導に生かす。

教師「いいところに気付いたね。では、2つのペアの和音はどう違うのかみんなで聴き合ってみましょう。」

第2次 主旋と和音の響きを感じ取って演奏の工夫をする。（4時間）

- 3 ○演奏の工夫をする。
4 ・グループ毎に音楽のイメージを持ち演奏の工夫をする。 パソコン使用

※パソコン教室のLANシステムを活用し、短時間に児童の意見や感想を集約する。そして、音楽的価値の気付きを工夫の手立てとして、児童の言葉で分かりやすく提示する。



- ・グループの演奏を互いに聴き合い、発表会に向けて練習する。



- 5 ○音の重なりや演奏の工夫に気を付けて発表会をする。
・工夫したことや思いを伝え、演奏をする。

※自己評価→グループどうしの相互評価（コンピュータのLANシステムを活用）→自分の演奏を振り返る→教師の評価

・指導

児童	振り返りの内容	教師の評価	教師の手立て
L	音量を気を付けた。	音のバランスがよくない。	オルガンの向きを工夫してメンバー全員で聞き合えるような形態を指導する。
M	低音を覚える。	やる気はあるのだが鍵盤は苦手である。	鍵盤にシールを貼って目印を付ける。
N	リズムを工夫したい。	リズムが単調。	曲想の変化を感じ取って、リズムを工夫させる。

相互評価・・・パソコンのグループのフォルダーを利用し、意見交換をする。（LAN機能の活用）

自己評価・・・個人のフォルダーに自分の意見や感想を記す。
教師による評価・・・児童の変容やねらいの達成状況を把握する。

(6) 考察

①児童による評価を、次時の指導へ生かす教師の工夫

発言・つぶやき・ペア学習による相互評価・ワークシート

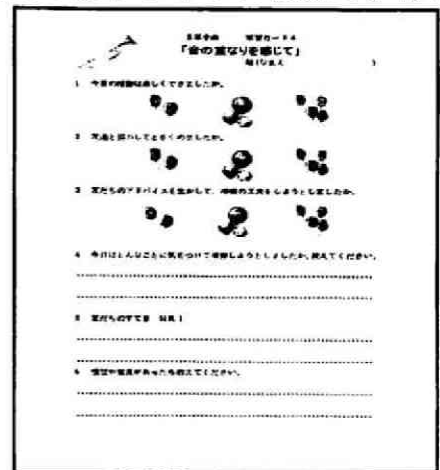
児童の気付きや感想を、工夫の手立て毎に整理・修正し、価値付けることにより、心情的な面から、音楽的資質の面へ高まり深まりが見られる。



②評価の信頼性や有効性を高めるための教師の工夫

学習カードには、教師のねらいや育てたい資質を児童の分かりやすい表現で、常に明示しておく。そして、簡便に記入する程度の項目にすると、毎時間継続して取り組むことができる。

また、その場で児童の思いや意見を集約するための手段として、パソコン室のLANシステムは有効であると考えられる。例えば、みんなの意見や感想を共有することで、友達からアドバイスをもらうことができたり、児童が自己を振り返り、今までの学習の成果や課題をもつために活用することができる。



児童	演奏聴取	ワークシート	関心・意欲 (自己評価)	教師の手立て
A	×	△	△	音の重なりを感じ取れるようにするため、ペア学習をさせる。
B	◎	◎	◎	伴奏のリズムを工夫させたり、演奏の苦手な友だちの補助をする。

教師による評価については、児童の自己評価・相互評価と併せて、単位時間、あるいは「次」毎に一覧できる上記のような評価補助簿を使用して、児童の変容をメモできるようにする。そして、毎時間の評価規準に照らし合わせて、題材の途中であっても指導と評価の計画を修正・充実させることが大切である。

2 「発展的な指導や補充的な指導の工夫」の実践例

(1) 題材名 「きいて あわせて」(第2学年)

(2) 研究主題との関連

一人一人の児童の音楽活動を豊かにするために、低学年では特に、よりよい音を出そうとすることや、友達と合わせようとするを大切にしたい。これが、中学年以降での合唱やアンサンブルにおける自立した活動につながるからである。そこで、本題材では、歌唱や器楽の活動を通して、自分や友達の出している音に注意深く耳を傾けたり、友達とふしを重ねて演奏する楽しさを経験させたりしたいと考えた。

(3) 題材の目標

拍の流れによって、自分の歌声や音の出し方に気を付けて表現するとともに、二つのふしを合わせて演奏することの楽しさに気付くようにする。

(4) 題材の評価規準

	㉓音楽への関心・意欲・態度	㉔音楽的な感受や表現の工夫	㉕表現の技能	㉖鑑賞の能力
題材の評価規準	二つの旋律を重ねて表現することに興味・関心をもち、進んで表現しようとしている。	拍の流れによって、歌詞の内容や曲の特徴にふさわしい表現を工夫している。	発音に気を付けて歌ったり、拍の流れによって演奏したりしている。	楽曲全体の気分や音楽の流れを感じ取ったり、友達の表現のよさに気付いたりして聴いている。

※3時間の題材であることから、題材の評価規準を学習活動に即して具体的に示した。

(5) 題材の指導と評価計画(3時間扱い)

時	学習活動	児童による評価	教師による評価方法	「発展的な指導や補充的な指導の工夫」の実践例 □教師の手立て※発展的な指導☆補充的な指導
第1時	音色に気を付けて表現する。	相互評価 「誰の音がきれいかな」	㉕ 発言、吹き・演奏聴取観察	□友達の音色から気付かせる。 ※前半も弾くよう促す。 ☆得意な楽器を選択してよいとする。
第2時	拍の流れを感じて表現する。	自己評価 「相手と合ったかな」	㉔ 演奏聴取観察・録画による評価	□二人で合わせて気付かせる。 ※☆いろいろなペアで、学び合いを図る。
第3時	特徴を聴き取り、重ねて楽しむ。	相互評価 「どのペアがきれいな重なりかな」	㉓・㉔ 発言、吹き、表情観察・録画による評価	□CDを活用して気付かせる。 ※☆一緒に弾くことで重ねる楽しさを知る。

(6) 考察

発展的な指導や補充的な指導を工夫するに当たって、本研究では、一つの学習集団の中で、どの児童も生かされる学習活動が成立するような指導の手立てを模索してきた。

①一つの楽曲の中で個々の学習活動に応じて音楽活動ができる教材の工夫

前・後半のふしが同一和声に支えられているため、これらを重ねて演奏することができ、ふしの重なりを楽しめる楽曲「子どもの世界」を教材に選択した。後半のふしに比べ、前半のふしは難しいので、後半のみを器楽教材とし、前半は発展的に扱った。そうすることで、全曲を一人で演奏できなくても、友達とつなげれば結果として全曲を楽しむことができた。さらに、これらふたつのふしを重ねて演奏する活動へと発展させることができた。

「子どもの世界」

シド レ シ ソ ラ ソ ソ ゴ ゴ ラ シ ド ラ フ ソ ゴ ミ レ レ

シド レ ソ ラ シ ラ ソ ミ ラ シド シラ レド シラ ソ

ソ ソ シ ソ ラ ラ ラ ラ ラ ド ラ シ シ シ

シ シ レ シ ド ド シ ラ レド シ ラ ソ

②どの児童も生かされ、相互に高まり合う学習過程の工夫

ア 補充的な活動を踏まえ二人組で合わせる活動（第2時）

ふしが一通り弾ければ、自己評価では「できた」であっても、教師は、「拍に合っていない」「音が濁る」と評価する場合があります。補充的な指導が必要だと判断する児童もいる。そこでまず児童の現状を受け止め、次に学習の方向性を示せるように、「そう、すごいね、じゃあ今度は二人組でやってみようか」と投げかけた。二人で合わせようとする、自ずと拍を揃えなければならなくなる。あるいは、互いの音を聴き合うためには「自分の音だけが聴こえる」世界から脱却せざるを得なくなる。どうしたら合うのか悩むペアには、他の友達の所に聴きに行くよう伝えた。その中で子どもたちは、拍を感じることやよりよい音色を求めることに気付いていった。

A児「ぼくが手を叩いてあげる（拍を打つこと）から、それに合わせてひいてみて」

B児「もっとやさしい音を出そうよ。こんな感じ。（やってみせる）そしたら合うよ」

また、「合った」児童には、相手を代えてもいいと伝えた。すると、相手によって速度を変えて、（相手に合わせて遅くしてあげるなど）演奏する姿や、A児の所について、「ぼくが手を叩いてあげるから、ふたりでひいてみたら」と声をかける姿も見られた。こうして、それぞれが、活動を工夫しながら音楽的な気付きや能力を高めることができ、補充的な指導





を必要とする子は、友達とのかかわりの中であつまずきの原因に気付きながら、自らを高めていくことができた。

イ 発展的な指導によるパート分担で合奏へと発展していく活動（第3時）

前時まで、前半部分は、よく弾ける児童のみが弾き、それ以外の児童は後半部分を演奏し、それらをつなげて全曲を演奏していたが、この時間のはじめにCDでふしの重なりを聴いたところ「自分たちも重ねたい」とすぐに声があがった。「前半のふしの子が、ふしの出前に行きましょう」と投げかけると、「ふし一丁たのみまあす」と、あちこちから声が掛かった。

「<おと・す>って入るんだったよ」（前半の歌詞「おとぎばなしのような」の「おと」のあとに、後半の歌詞「すてきなせかい」の「す」が入る、ということらしい）、「最後はぴったり重なってたよ」など、CDで聴き取ったことをもとに、主体的に活動が展開した。個々の児童は、前時までと同じふしの演奏だが、全体としての音楽活動は深まっていた。

③学習状況の的確な把握と、計画と実際との比較、指導計画の見直しを図る評価の工夫 ア 児童の学習状況を的確に把握できる評価方法を選択する。

時	学習活動	教師による評価	評価方法選択の意図と、発展・補充への配慮
第1時	音色に気を付けて表現する。	・発言、吹きによる評価・演奏聴取観察 	・よい音色への価値観を育てるため、互いに聴き合う場を設定した。そこに教師の助言による価値の具体化を加えながら、友達の音色のよさへの気付きを促した。また、補充的な指導を必要とする児童が、かかわりから音色のよさを学べるよう配慮した。
第2時	拍の流れを感じて表現する。	・演奏聴取観察・録画による評価 	・拍感を育てるため、「合わせる」活動を通じた自己評価を促した。教師は、かかわりの中でのつぶやきを追うため、録画を併用した。活動のリード役にすることを発展的な指導の内容とした。
第3時	特徴を聴き取り、重ねて楽しむ。	・発言、吹き、表情観察・録画による評価  	・児童が各ペアを廻って聴き、評価し合うことで重なりを確かめられるようにした。教師は、重なりを正しく捉えたか、楽しんでいるかを発言などから評価するとともに、録画を継続し、変容を確認した。楽しい活動で、無理のない補充的な指導を図った。

イ 計画と実際との違いを検証し、指導計画の見直しを図る。

次頁資料1のような表（一部引用）を用いて、前時の評価と、本時の手立てを記入していた。評価には録画による記録に加え、個人ごとのポートフォリオが有効であった。その際、低学年では記述式のワークシートは難しいので、シールやスタンプの活用による記録や、楽譜への書き込みやアンダーラインといった程度の作業に留めるようにした。なお、表中の矢印は前々時から前時にかけての変容を示したものである。↑は、発展的な指導を必要としつつある姿、↘は、補充的な指導を必要としつつある姿を表している。

また、その時間のねらいについては→である児童にも、その子に応じた手立ては必ず生まれる。例えばこの表では、録画を再生しての評価で奏法の未熟な児童に気付いたり（前時

の評価の欄、A児)、その他にも、活動中の表情から、自信を引き出す個別のかかわりが必要と感じた児童(同、T児)や、二人組での活動に際しての配慮が必要と感じた児童(同、R児)などを合わせると、すべての児童に対して、それぞれ次時の手立てが必要であったりした。しかし、本時にはその時間の学習のねらいがあり、それに沿った学習活動が進行する中では、実際にはすべての児童に対して、必要と感じた手立てを講じることができなかった。一人一人に対する評価が詳細になるほど、個への手立ても詳細になるが、それらの手立てと、次時のねらいとのすりあわせが大切である。

また、本実践では、その時間の評価規準に照らして評価すると、発展的な指導や補充的な指導の対象児童は毎時異なった。固定的な見方ではなく、毎時間の評価規準に基づいて適切に評価し、それを指導に結びつけていくことを実感した。

<資料1> 前時の評価(枠内)と、本時の手立て(枠外)の表 (部分)

<p>R児 → 一人ではOK。M児と合わず少しイライラ。</p>	<p>M児 → 最後のアウトパクトから跳躍進捗つまずく。</p>	<p>T児 → 表情に余裕なし。ばちさばきも自信なさげ。</p>	<p>A児 → 演奏はぎこちないが、歌いながらのりのり。</p>	<p>K児 → どんどん速くなりつかえる。拍に合わない。</p>
<p>M児が弾けるようにR児がうまくかかわれるための支援をする。</p>		<p>奏法の定着のための別指導をする。</p>		<p>拍を揃えて二人で合わせられるよう、引き続き支援。「出前」役になれるか?</p>
		<p>O児 → 強弱や音色の工夫までできている。</p>	<p>H児 → T児と合わせてでき、音色もよくなった。</p>	<p>Y児 → こつこつ練習。だんだんひけてきて嬉しそう</p>

<資料2> 見直しをした指導計画(第4時)

時	学習内容	児童による評価	教師による評価方法	□教師の手立て ※発展的な指導 ☆補充的な指導
第4時	楽器のよい音色を見つけ、重なる響きを楽しむ。	相互評価	演奏の様子 観察・演奏 聴取観察	□ばちの扱い方や打点を意識付けよい音色や響きに気付かせる。 ※いろいろなばちを用意し、音色や響きの違いを経験し、自ら選択できるようにする。 ☆教師との二人組に誘い、意欲を喚起する。

V 研究のまとめ

研究主題「一人一人の児童の音楽活動を豊かにする指導と評価」を追究するに当たり、「児童の自己評価力、相互評価力を高めるための指導の工夫」「発展的な指導や補充的な指導の工夫」の2点を研究の視点とし、今年度は、「指導と評価の計画の工夫・改善と活用」について、より具体化を図るとともに、「個に応じた指導の在り方」について、授業実践を通して研究を進めた。その結果、以下の成果を得るとともに、今後の課題が明らかとなった。

1 研究の成果

- ・評価の信頼性や妥当性を高めるために、映像や音声による記録を継続的に活用することにより、児童が自分の学習を客観的に振り返ったり、自分の変容に気付いたりすることができ、課題をもって活動する様子が見られた。
- ・教師が児童の自己評価力、相互評価力を高める指導を行うためには、学習過程において、意図的・計画的に児童による評価の場面を位置付けたり、教師が児童の評価を価値付けたり、視点を明確にしたワークシートを活用するなどして、児童にフィードバックしながら、継続していくことが有効であった。
- ・発展的な指導を必要としている児童と補充的な指導を必要としている児童が一つのグループで活動するなど、教師の意図的なグルーピングを工夫することにより、児童の相互評価が生かされ、音楽の質的な高まりが生まれた。
- ・毎時間、評価した児童の活動観察や自己評価カード等を整理し分析することで、児童一人一人の様子や願いが分かり、児童の側に立った指導を展開することができた。
- ・どの児童も生かされるために、難易度の違う内容が含まれている教材を選択することにより、一人一人が成就感をもったり、感動をみなで共有したりすることができた。

2 今後の課題

本年度の研究を通して、今後の課題として、次のことが明らかとなった。

限られた時間の中で一人一人の児童を、能力面、情意面の両面から評価し、確実に変容させていくためのより有効な評価の手立てを今後も継続して研究開発していく必要がある。

評価は、児童をよりよく育てるものである。児童のよさや可能性を見だし、よりよく変容させていくためには、深い児童理解の下、より効果的な評価方法をさらに研究することが大切である。評価を記録することで授業の本質を見失うことにならないよう、効率のよい評価方法、指導法、視点を絞った評価、資料整理等をし、評価を総括的な結果としてのみ見るのではなく、次の指導の改善を模索していく資料として活用していかなければならない。そして、児童が、友達とのかかわり合いの中で豊かな音楽活動をし、自分の存在を感じられる授業を展開していくよう、今後も研究を深めていくことが重要である。